

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

イカナゴ類

イカナゴ *Ammodytes personatus*

キタイカナゴ *A. hexapterus*

系群名 宗谷海峡

担当水研 北海道区水産研究所

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > ダイジェスト版



生物学的特性

寿命: 6歳以上

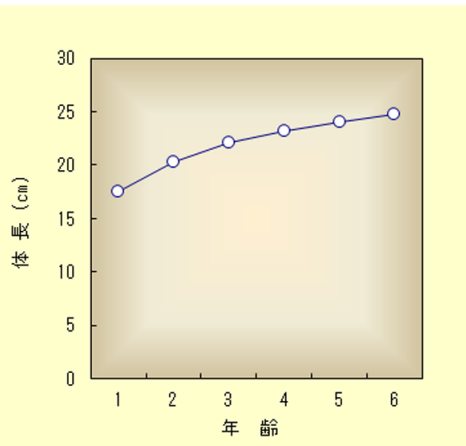
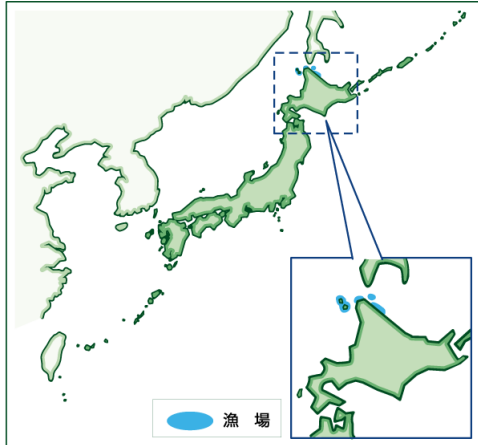
成熟開始年齢: 3歳

産卵期・産卵場: イカナゴは春季(3月下旬～5月上旬)、稚内、枝幸および利尻・礼文周辺の沿岸域、キタイカナゴは初冬(11月下旬～12月)、サハリン周辺の沿岸域

索餌期・索餌場: 宗谷海峡周辺の水深40～80mの砂礫地帯

食性: 未成魚はカイアシ類などの浮遊性甲殻類や珪藻類、成魚はカイアシ類、端脚類、オキアミ類、十脚類、ヤムシ類、魚類

捕食者: 魚類、海獣類のトドなど

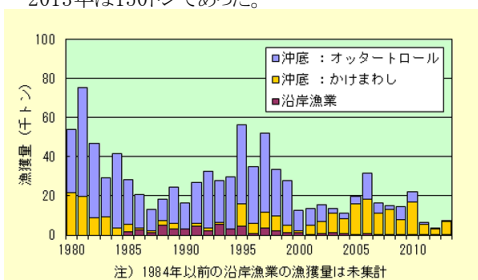


漁業の特徴

宗谷海峡周辺のイカナゴ類の大部分は沖合底びき網(沖底)によって漁獲される。小型定置網、すくい網および敷網などの沿岸漁業でも漁獲されるが、その量は少ない。沖底漁業(オッタートロール、かけまわし)は、主に宗谷海峡東方海域において、1～6歳魚の索餌群を漁獲対象として6～9月に実施されている。沿岸漁業では、利尻島・礼文島周辺海域や稚内沿岸において、0～3歳魚を4～7月に漁獲している。なお、近年は漁獲物の大半がイカナゴで、キタイカナゴの混入率は低い。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1982年以降減少し、1987年には1.2万トンに落ち込んだが、その後増加し、1995年には5.2万トンに回復した。2000年以降に再び減少に転じ、約1.0万～2.0万トンの低い水準で推移した。2011年以降の漁獲量は1.0万トンを下回り、2013年には0.7万トンであった。沿岸漁業も2000年以降は50～1,200トンの低い水準で推移し、2013年は150トンであった。

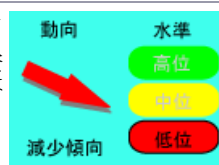


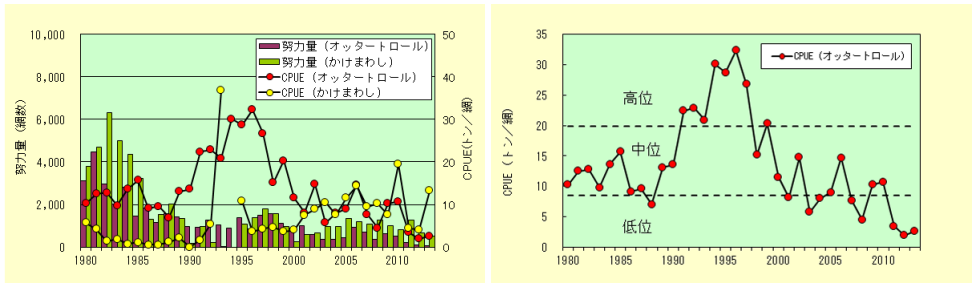
資源評価法

資源水準・動向の判断には、1986年以降のオホーツク海のオッタートロールCPUEを使用した。ただし、当該資源はロシアの水域にも分布していることと、イカナゴ漁業の形態は変化してきていること(沖底の減船、ロシア水域での漁獲割り当ての消滅、オッタートロールとかけまわしの漁獲量の逆転)が理由で、CPUEに基づく長期的な資源水準の判断には不確実性が伴う。そこでCPUEに加えて、年齢別漁獲尾数・割合の情報も判断の参考にした。

資源状態

1986～2012年のオッタートロールの平均CPUEを50とし、 50 ± 20 を中位水準、それ以下を低位、それ以上を高位と規定すると、2013年の水準指数は9であった。また、年齢別漁獲尾数・割合から、2013年の1、2歳魚の資源豊度は高くないと推測した。以上のことから、資源水準は低位と判断し、過去5年間(2009～2013年)のオッタートロールCPUEから動向は減少と判断した。





管理方策

近年のイカナゴ類の資源水準が中～低位に留まっているのは、豊度の高い年級群が加入していないことが要因と考えられ、2013年についても2010～2012年級群の加入状況は悪いと推測した。そのような状況の下、稚内根拠のオッタートロール船は2011年度までの資源回復計画によって現在では1隻となり、かけまわし船は操業の自主規制によって2013年の漁獲努力量が低水準となった。沖底による漁獲努力量は2013年に過去最低となったが、資源状態が良くないとは判断できないため、これまでの資源回復計画での取り組み（操業期間の短縮、休漁日の設定）を資源管理指針の下継続しながら、今後の加入状況に十分注視していく必要がある。

資源評価のまとめ

- 1986年以降のトロールCPUEより、資源水準は低位、動向は減少
- 資源動向は、加入年級群の豊度により変動する

管理方策のまとめ

- 北海道は、2004年に宗谷海峡のイカナゴを資源回復計画の対象種に指定した（2011年一部改変）
- 2012年度以降は資源管理指針の下、漁獲努力量削減の取り組みを継続して実施している
- 資源の回復を推進するため、これまでの資源回復計画での取り組みを継続しながら、今後の加入状況に十分注視していく必要がある

執筆者: 岡本 俊・加賀敏樹・船本鉄一郎・山下紀生

資源評価は毎年更新されます。